



中国内モンゴル自治区フフホトにおける「都市部モンゴル族」の民族アイデンティティの再構築に関する研究

格根[トヤ]

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2009-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4785

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004785>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 格根図亜
博士の専攻分野の名称 博士（学術）
学 位 記 番 号 博い第 4785 号
学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付 平成 21 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

中国内モンゴル自治区フフホトにおける「都市部モンゴル族」の民族アイデンティティの再構築に関する研究

審 査 委 員

主 査 教 授 小高 直樹
教 授 中山 修一
教 授 魚住 和晃
神戸大学名誉教授 岩井 正浩
国立民族学博物館教授 小長谷 有紀

論文内容の要旨

氏名 ^{げげんとや}格根図亜
専攻 コミュニケーション科学専攻
指導教官氏名 小高直樹

論文題目

中国内モンゴル自治区フフホトにおける
「都市部モンゴル族」の民族アイデンティティの再構築に関する研究

論文要旨

中国におけるモンゴル社会の都市化は1950年代以降から、1980年代を境に急速に進行している。したがって、従来の「草原の民」として語られてきたモンゴル族の1/3は都市住民に変身しつつある。しかしごく一部の研究者を除けば、都市部モンゴル族の文化研究は未だなおほとんど行われていないのが現状である。

経済と情報のグローバル化が進むなか、都市部のモンゴル族を孤立した存在として考えることはもはや不可能である。人とももの往来が激しさを増し、都市はいわばブラックホールのように、さまざまな人、あらゆるものを吸い寄せる場であると同時に、四方に向かって人、もの、情報を発散しつつけている。そのため、今日の中国におけるモンゴル族の文化を理解するのにあたって、いわゆる遊牧モンゴル族や農耕モンゴル族は言うまでもなく、都市部のモンゴル族の生き様も大変重要なポイントとなっていくのではないだろうか。なぜなら都市文化には、今激動する中国の社会の中を生きるモンゴル族たちが所有する文化を理解していくための、数多くのヒントが隠されていると考えるからだ。

近年、モンゴル族社会における生業の変容による一連の文化変容に関する研究、すなわち農耕モンゴル族を扱った研究が盛んに行われてきた。これによって、いわゆる伝統的な遊牧社会の反対側に位置するもうひとつのモンゴルの社会の実態が明らかになってきた。

そこで、ついにひとつの疑問が浮上してくる。つまり、中国におけるモンゴル社会はこのまま対極の方向へ文化の乖離が進んでしまうのだろうか。それとも、どこかで

合流し、新たな文化が生み出されてゆくのだろうか。事実、文化の合流はすでに人々の気づかないうちにある「場」において速やかに行われているのである。その場はつまり都市である。

以上の問題意識から、本研究では中国のモンゴル社会に進行している都市文化の形成を取り上げることで、さまざまな文化的、社会的背景をもったモンゴル族が、都市という空間の中において、いかに民族的アイデンティティを確保しようとしているのか、そしてそれがどのような形で表出しているのかを見ていくことで、都市部におけるモンゴル族の民族的アイデンティティの再構築の実態を明らかにすることを目的とする。

本研究では調査地域としてフフホトを取り上げる。内モンゴル自治区の首府フフホトは、かつて農耕地帯と遊牧地帯という南北方向の区分の境界に位置すると同時に、東アジアと中央アジアとを結ぶ伝統的な東西方向の交易路上にも位置した都市であった。それゆえに、フフホトは政治的、軍事的、経済的な要衝となり、モンゴル社会の歴史上に大きな役割を果たしてきた。そこに1950年をはじめ、1980年を境に内モンゴル自治区の各地方からのモンゴル族が殺到するようになり、1949年建国当初の市内人口の1487人が2006年では14万5千人に達し、実に半世紀余りの間において人口が97倍にも増えたことになる。そこで、筆者はフフホトにおけるモンゴル族への聞き取り調査とアンケート調査を実施し、分析することで、研究の裏付け資料とした。

以上の本論文の目的に達成するため、本論文は以下の序章、本文と終章を用いることで論点を展開する。

まず序章においては本研究の研究目的と研究史について述べる。

次の第1章においては、フフホトという町の建設の歴史的経緯及び、歴史上フフホトを構成する姉妹都市の帰化城と経遠城のそれぞれの歴史的役割や特徴を見ていくことで、モンゴル地域におけるモンゴル族のもとに建設されたフフホトの異文化受容の実態を明らかにする。

第2章において、中国建国以降におけるフフホトへ移住することでモンゴル族の間で認められる自文化と遭遇の実態を、まず清朝によるモンゴル地域の統治を詳細に見ていくことで、モンゴル地域における3種類のモンゴル族の生成、すなわち純農、半農半牧、純牧などの地域生成の歴史的経緯並びに、それに伴ったモンゴル族の漢化の実態を解明することで明らかにする。

第3章においては、歴史上一貫して認められるモンゴル族社会の職業形態の単一化を取り上げ、とりわけモンゴル歴史上における女性の社会的地位の変遷を見ていくことで、モンゴル族社会に新たに形成される都市文化の解明を試みる。

第4章では、歴史上農業への生業の変容により、民族文化である民族衣装を着なくなったモンゴル族の人々が、フフホトに移住することをきっかけに、着るようになっていく。また、そこに着せられる段階から着るという段階までの二つの象徴的な過程として捕えられる。そこで、2つのそれぞれの意思表示を表わす段階の行動を分析す

ることで、都市部モンゴル族の民族的アイデンティティを再獲得する実態を明らかにする。

第5章においては、モンゴル族社会の伝統的な文化が、まず初期の段階における都市部においていかに喪失されているのかを見ていき、他方それが中国の改革・開放政策以降にまた如何にして再構築されているのかを対比することによって、都市部モンゴル族の民族文化の再構築の実態を明らかにする。

最後の終章においては、本論を通して見てきたように、生業の変容によって一部のモンゴル族は遥か昔に自民族の伝統的な衣・食・住の文化を喪失していた。その彼らが、都市部に移住することに伴って、次第に失っていた自民族の伝統的な文化を再獲得、再構築するようになったことを明らかにする。

本論を通して明らかとなったのは、フフホトはモンゴル族の支配のもとで建設されたが、住民のほとんどは漢族であった。帰化城と呼ばれた現フフホトの旧城あたりは、モンゴル族の宗教であるチベット仏教の聖地であったとともに、また旅蒙商と呼ばれる漢族商人の対モンゴル交易の拠点と基地として発展してきた。一方の現フフホトの新城あたりで建設された綏遠城は、主に清朝政府の旗人たちの町として、政治的軍事的要衝の役割を果たした。また、清朝の統治下のモンゴル族は、清朝の懐柔策によって、盟旗制度のもとに領地、爵位を与えられ、一定の官職を与えられるも、清の支配下である事には変わりはない。やがて清の末期の政治的な混乱を利用し、北モンゴルは独立を試みる。それをうけて、対モンゴル交易で発展してきた帰化城の経済に影響を落とすこととなる。さらに鉄道建設の発展や、揺らめく国際貿易市場の影響および、北モンゴルの完全独立により、フフホトの町も次第にさびれていった。1912年からの中国の民国期には、清の支配民族であった満州人はともかく、モンゴル族も政治の舞台から姿を消していき、代わってフフホトにおける権力機構は入れ替わる漢族によるものであった。同時期に、それまで清朝が創り上げた盟旗制度も、民国期においては再編成され、中国内地と同様に省、県など行政区画が導入され、モンゴル地域の同化を図った。そこで、この同化政策に反旗を翻したのはチャハル盟西スニト旗の親王であるデムチョクドノロブ（徳王）である。1936年に徳王は日本の勢力を利用し、汎モンゴル主義のもと、内モンゴルの独立を試みるも、1949年中華人民共和国が正式に成立したことで彼の夢も完全に断たされた。中国が建国した当初、政府が打ち出す民族政策のもと、400年余りの年月を経て、モンゴル族のもとで建設されたフフホトに、モンゴル族自身はようやくそれなりの規模で移り住むようになる。それまで盟旗制度と封禁政策によって分断され、さらに移動は制限されたままで、地方に留まっていた人々がフフホトに移住することで、初めて民族同士が出会い、触れ合い、知り合うのである。中には伝統的な遊牧の文化を持つ人々もいれば、中国建国前のはるか昔から既に自民族の伝統的な衣・食・住の文化をほとんど喪失していた人々もいる。こうした彼らの多くは、当時共通した理念があった。すなわち「我々は同じ中国という社会主義大家族の中において、同じ目標に向かって協力し合う兄弟であり、同志だ」という、

いわば国民意識のもとに、中国の社会主義の建設に全力を注いだ。ところが、1950年代後半から始まった一連の政策上の問題により、彼らの希望に満ちた将来への展望に少しずつ影が落とされていった。とりわけ1966年から始まった10年間にわたる文化大革命の期間中、モンゴル族の受けた被害は絶大なものとなり、清朝以降から始まった彼らの苦難な歴史は中国建国以降のこの時期までに続くこととなった。やがて、この苦難の歴史が原動力となって、中国改革・開放政策以降自民族の言語文化を取り戻そうという動きによって現れた。ところが、就職難などの現実問題にぶつかって跳ね返られる結果となる。そこで、行き場を失った彼らの民族への思いは、さまよい始めて、違ったかたちで息を吹き返すのである。それはつまり、近年新たな展開を見せる商品化される民族文化の消費への移行という行為に見出せる。一方、彼らのその行為には多くの矛盾や排斥や葛藤が入り混じっていることも指摘しておきたい。しかしそうだとすると、彼らの行為に確実に新たなアイデンティティの構築へむけての模索が確認出来たと言える。

論文審査の結果の要旨

氏名	格根 図亜 (げげんとや)		
論文題目	中国内モンゴル自治区フフホトにおける「都市部モンゴル族」の民族アイデンティティの再構築に関する研究		
判定	合格、不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査	教授	小高直樹
	副査	教授	魚住和晃
	副査	教授	中山修一
	副査	神戸大学 名誉教授	岩井正浩
	副査	国立民族学 博物館教授	小長谷有紀

要 旨

本論文は、中国内モンゴル自治区の省都フフホトを取り上げ、改革開放以降、フフホトに流入したモンゴル族が、その民族アイデンティティをどのように構築しようとしてきたのかを、文献資料とフィールドワークにもとづきながら明らかにしようとした物質文化研究である。

序章では、本研究の意義と目的を述べ、研究史を概観している。すなわち、モンゴル文化に関する研究領域にあって従来から空白部であった都市に居住するモンゴル族に焦点をあてた研究であること、また具体的な物質文化を切口とする実証的研究であることが本研究の意義であるとともに、その新規性、独創性を示すものであることを指摘している。

第1章では、本研究の調査地域であるフフホトの歴史とモンゴル族との関係を踏まえ、歴史上、都市部にモンゴル族がそれなりの規模を持って居住するようになったのは、中華人民共和国建国以降の、とりわけ改革開放以降のたかだか20、30年の期間であることを指摘し、そうであるがゆえに、現在フフホトにおいて形成されつつあるモンゴル族の新たな文化が、モンゴル地域の近現代の歴史上、重要な意味を持つものであることを示した。

第2章では、長い歴史の間にわたって単純な生業の内部に閉じ込められてきたモンゴル族が、都市フフホトに流入し、多様な生業に進出していったことが、

やがてフフホトにおけるモンゴル族の新たな文化の形成につながっていったと述べている。すなわち、モンゴル族の生業の三類型化をもたらした要因が、清朝統治下における対モンゴル民族統治政策、モンゴル王公の腐敗、モンゴル族自身の遊牧文化固有の世界観及び仏教の影響などであることを文献資料にもとづいて指摘し、さらに、第二次世界大戦を経て、中華人民共和国の建国以降、とりわけ改革開放後の80年代に、経済のグローバル化と政府による民族政策を背景として、多くのモンゴル族がフフホトに流入し、さまざまな生業をもつ者が現れ始めことを示して、その具体的事例として、近年フフホトにおいて発足し、発展している民族服飾生産工房をフィールド調査して紹介している。

第3章では、フフホトにおけるモンゴル族が、新たな民族アイデンティティをどのように再構築しようとしているのかに関わって、生活様式のとくに衣食住から検討を加えている。「衣」文化については、民族衣装工房の設立や生産される衣装のデザイン性に、「食」文化については、モンゴル料理を扱う飲食業への参入とモンゴル族自身を対象としたモンゴル料理店の設立に、また「住」文化については、日常的な生活空間における遊牧文化的な要素の配置に、アイデンティティ構築を模索するモンゴル族の姿を見出している。続けて、第4章で、こういった諸現象を、自文化との遭遇と受容という視点から総括するとともに、そのなかに見るかれらの行為を、人びとの証言を引用しつつ、中国建国後の民族意識の消長のなかに置き直して検討している。すなわち、商品というかたちでの民族文化の再生産に自身が消費者として関わるとい、モンゴル族の自文化受容としての消費行動は、文化大革命を契機とした民族意識の高揚とモンゴル語教育の挫折の延長線上に捉えるべきであること、そしてその挫折を抱えながらも、今なおかれらの新たなアイデンティティの構築にむけての模索が続いていると締めくくっている。

モンゴル文化に関する研究領域においては、従来から空白部であった都市に居住するモンゴル族に焦点をあてた研究が近年急激に増加しているが、本論文はその一つであるというばかりでなく、民族アイデンティティの再構築という側面に関する専論として、文献資料やフィールドワークを統合することに成功している。これまでに類例のないモノグラフとして高く評価される。とりわけ、民族アイデンティティの再構に関する研究は一般に抽象的かつ思弁的な考察が多いのに対して、物質文化を媒介とし、具象的な分析を進めている点で有意義であり、本人も指摘するように、この点が本論文の新規性および独創性を支えるものとなっていると同時に、今後、さらなる研究の発展が期待される。

本研究は、中国における都市部モンゴル族の民族アイデンティティの再構築に関して、内モンゴル自治区の省都フフホトを取り上げて研究したものであり、従来空白であったモンゴル文化研究の領域において一定の知見を与えたものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の格根図亜は、博士(学術)の学位を得る資格があると認める。

なお学位申請者は、本論文に関わる下記の論文2編(審査つき学術論文1編、関連論文1編)を発表しており、博士学位申請の基本的条件を満たしている。

- ・格根図亜「中国内モンゴル自治区フフホトのモンゴル族—自文化との遭遇と受容」『表現文化研究』第4巻第1号、2004、pp.1~12.
- ・格根図亜「从服飾文化的演变看城市蒙古族的民族认同—中国内蒙古自治区呼和浩特市事例研究」『内蒙古大学艺术学院学报』第6巻第1号、2009、pp.5-11.